



TITLE:

質疑應答

AUTHOR(S):

---

CITATION:

質疑應答. 地球 1924, 1(2): 194-198

ISSUE DATE:

1924-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182633>

RIGHT:

い、人士の一讀を切望する。(ナカムラ)

○朝鮮部落調査豫察報告 大正十二年三月朝鮮總督府發行

本書は囑託小田内通敏君の調査によつた者で第一章に部落調査の意義、經過、計劃をのべ第二章に部落の考察として各道に亙り著名な部落二個又は三個づゝ合計十六の里について部落の構成又は特相、經濟狀態、教育狀況等が述べてある、文中寫眞を以て説明を補足する外、卷末に圖版七十三版を加へ、讀者をして部落の實況を目睹するの思あらしむる。特に卷頭には小田内君が苦心の作、朝鮮郡別人口密度圖がある、交通、地勢と人口分布の關係が明瞭に出てゐる予は此種の報告が第一冊に止まらずして、二冊三冊漸を追うて出版せられん事を望む。

(非賣品)(藤田)

○北滿洲と東支鐵道上卷

大正十二年五月  
南滿洲鐵道調査課

本書はオムスク政府のミハイロフ氏が學者を集めて一九二二年二月に完成した東支鐵道廳の編纂物を翻譯した者である。第一編北滿洲概況

には北滿洲の地理及住民と經濟組織を論じ更に行政組織を記し第二編生産業には農業、穀物取引、穀類取引と其輸送、畜産業總論、牧羊と牧馬、牛、養豚、養禽及漁業。林業、及其他の生産業。として森林及礦物特に石炭に關して詳細なる説明と統計的研究がのつてゐる。下卷は工業編と東支鐵道編との二部から成立してゐるがまだ發刊されない、上卷だけで五百五十四頁の大冊子で地圖及圖表の數四十四に達し印刷鮮明材料豊富なる權威的著述である。蓋し北滿洲の現勢を諒解するに本書の如く有益なるは稀に見る所で敢て江湖に一餐をすゝめる。(藤田)

## 質疑應答

(問) ブリュクナールの週期に就き簡單なる説明を乞ふ。(信州、好學生)

(答) 氣候の變動に週期的なると連續傾向的なるとの二種ある。週期的變動は太陽の黑點に關

係があると言はれてゐるブリュクナ―は澤山の精密な統計から其關係を一層明白に歸納した。そして其の週期は平均三十五年だといふ。各期は寒暖の兩半に分れるが、丁度一年間の日々の温度は極寒極暑の兩點の間に動搖しながら次第に暖くなり冷くなるやうに、年毎の平均温度は必ずしも寒くなる期間だからとて年々順序を追うて下るといふことはなく多少の不規則な動搖は免れるを得ない。同様に毎年の氣候で極寒の日の間が三百六十五日ではなく亦此週期も最低温度の年と年との間は二十年と五十年の間にある。

氣溫變動は全地球上に同時に並行して起るから其原因は地球外に無ければならない。吾人は先づ日光の週期的變化に注意する必要がある。太陽の黒點數の最大最小の時は週期をなしてゐるもので、其はブリュクナ―の週期に一致してゐるのは面白い事實と想はれる。氣溫が本となつて氣壓の變化によつて多雨乾燥の週期が導かれて來て、此等に更に湖面の高下から氷河の

進退にまで關係がある。が一々説明するよりも次の表を一見した方が明かに知れる。氣象觀測の統計に於て三十年以上繼續しなければ正確な平均値が得られないといふのも多分此の週期がある爲めだと考へられる。

(備考)

自一八〇五	至一八二〇	寒	寒溫は氣溫、乾
自一八〇五	至一八二〇	寒	濕は雨量、進退
自一八〇五	至一八二〇	寒	はアルプス氷河
自一八〇五	至一八二〇	寒	の變化を示す。
自一八〇五	至一八二〇	寒	ブリュクナ―
自一八〇五	至一八二〇	寒	は尙ほ此等の事
自一八〇五	至一八二〇	寒	實以外に葡萄小
自一八〇五	至一八二〇	寒	麥の收穫豐凶を
自一八〇五	至一八二〇	寒	も參考して一七
自一八〇五	至一八二〇	寒	三一年まで遡つ
自一八〇五	至一八二〇	寒	て推定數を計算し
自一八〇五	至一八二〇	寒	たのである。(横山)
自一八〇五	至一八二〇	寒	たし。(岡)
自一八〇五	至一八二〇	寒	水路としてのダニ
自一八〇五	至一八二〇	寒	ュープ河の價值を知り
自一八〇五	至一八二〇	寒	たし。(京都、鈴木生)

(答) 水路としての第一義は航行の可能である  
地圖には大河の終航點が出てゐるけれども、どんな船がそこ迄廻れるかは明ではない、例令はテームス川はオックスフォード迄航行されると記されてゐるが、定期航は、チルブで止まるがこれらの大船は倫敦橋までしか上れない。しかし普通の運送船ならば市のハンマアスミスまで廻る、もし小蒸汽にのるならばオックスフォードよりも上流に廻れる、従つて水路と一概に言つてしまへない。今主なる歐洲の水路について其船の大きさを見ると、大體二百噸以上の荷物を運ぶ蒸氣船が通れないやうな水路はまづ經濟的價值が少いと見てよい。

水路名	船の噸數	吃水
佛白カナル(ベニシユ)	二八〇—三〇〇	一・八
鐵門上流のダニユア	六〇〇—八〇〇	・五—一
ライン、ヘルン運河	一三〇〇	二・五
マインツ、フランクフルト間	一六〇〇	二・三
ホヘミアニ於ケル大エルベ川船	一一五〇	
ラインの大運送船	三五八〇	二・八五
ラインの小運送船	一五〇〇	二・五

但し水深なるものは年によつて變化があるから

其深さの恒久が尤も必要であるは言を俟たず、水の速力も亦水路の價值に影響する、ラインでもストラスブルグより上流へ廻るためには費用が多くかゝる、其他泥の量とか、氷とか、洪水とか、霧とか航行を妨ぐるものが多い、さてかやうに水路としての條件が具備して居ても、其沿岸の人文の發達如何によつて通商の價值がない場合が多い事を注意せねばならぬ、航行の條件としては河の兩端に商業を起すに足るだけの人文が發達せなくてはならぬ、今獨逸國內に於ける水路が一九一二年に運んだ貨物の量を掲げると左の如くである。

オアデル水路系	一一、〇〇〇、〇〇〇佛噸
ベルリン運河系	一八、五〇〇、〇〇〇
エルベ水路系	二五、七〇〇、〇〇〇
ウエーゼル、エムス、エーデ系	九、五〇〇、〇〇〇
ライン系	七五、〇〇〇、〇〇〇
ダニユア系(パバリア)	七〇〇、〇〇〇
轉じてダニユア川の各部に就て見ると	
パバリア、ダニユア	四三三、六三六
オウストリア、ダニユア	二、五九〇、〇〇〇
匈牙利、ダニユア	五、〇九三、〇〇〇
ルーマニア、ダニユア	五、一八三、六六八

ブルガリア、ダニユーブ

合 計

六二二、〇〇〇

一三、九一二、九〇四（一九一二）

其の水路の長さから見ても東西に互る交通から見ても、ダニユーブ川がライン又はエルベ川に匹敵するものであるとは誰も考へ及ぶ所であるに不拘、事實上掲の數字の示めすが如く其の何れにも及ばないのである。其の理由を考ふるに、上流に於て水量が少く急流が多く、春期氷塊が流下する事及淺瀬が多いために、レーゲンスブルクより上流は之を利用するのが困難であることの外に中流には鐵門の難關がある、兩岸の山が狭まつて水流が速いといふ事の外にオルソバの附近二千五百米は非常の淺瀬で冬期殆ど舟の運行を止めるといふ一大缺點があるからであるが、更にこの河の水路の價値を減するものは、沿岸に存する各國の利益が統一しないといふ事である。最後に人文地理上の缺點と思はれるのはこの川が東から西へ流れないで西から東へ流れると云ふ事である、蓋しこの川の上流地方の物産は精製品で下流沿岸に農産物がある、

質疑 應 答

下りは軽く上りは重い、従つて容積の大きい農産物を川舟にて運んで中歐に送くるよりも川を下つて黒海又は地中海をへて海路北海に送る方却つて廉く付くからである、この意味でダニユーブの水運は到底ラインに及ばないのである。

（藤田）

（問） 小川先生の人文地理、自然地理、地理學通論に關する御講義のプリント御知らせ下さい。（静岡、石田秀）

（答） 先生の人文地理以下に對する御意見は、藝文、地學雜誌、史林などに出てゐます、京都府教育會の開催せる講習會にて講演されたものは、左記の標題で發賣されてゐます、其他にありませぬ。

一、近畿地方の土地と住民 京都府教育會發行  
定價 金貳拾錢  
（問） 地形學研究の地圖、獨逸のものを御知らせ下さい。（静岡、同人）

（答） W. M. Davis und K. Oestreich:  
Praktische Übungen in physischer geographie... Text und Atlas

地球

第一卷 第二號 一次 八六

Teubner, Leipzig 1918. 約三圖

日本近生代地層の對比

矢部 長克  
青木 廉二  
木部 一郎

(問) 地質圖のある(世界)地圖御知らせ下さい。(同人)

(答) (一) 左記は中央歐羅巴だけの地質圖がついてゐる。

東北大學地質礦物學教室研究邦文報告第四號 〇一三年二月丸善發賣金貳拾錢

青地 乙治

(二) 左記は世界的地質圖です。

Sydow-Wagners: Schut-Atlas 價約六圓

北海道の火山湖

田中 館秀三

Berghaus: Atlas der geologie... 1892

地學雜誌 一三年一月〇三六ノ四一九

地球化學

地球の化學變化

柴田 雄次

(三) 左記は一葉もので掛圖によろしい

價格拾五圓?

日本教育 一三年二月〇三ノ二

Milner: Geological chart of the World

Stanford, London. 價格拾貳圓

編輯便り

□ 創刊號初版賣切れの爲め目下再版に着手、附録地圖の印刷に手間取つてゐます、忽卒の際いろ／＼急がしい爲に本號出版の遅れました事をお断いたします、三號からはと誓ひます。

□ 入閣希望の申込も亦日々殺到の盛況であります次號以下に閣員名簿をのせやうと思つてゐます。

□ 本誌は最初に聲明しました通り團員諸君に養育まれつゝ成人して行くのですから各團員諸君の手になつた地方の地理學的報告を歡迎してゐます。どうか大小長短に限らず御投稿下さい。

□ 新刊紹介を望まるゝ方は御著述を本園に寄贈して下さい。

新著題目

地震

地質學上より見たる島原半島の地震

佐藤 傳藏

地學雜誌 一三年一月〇三六ノ四一九

關東地震調査概報

小川 琢治

地學雜誌 一三年一月〇三六ノ四一九

地質